
現実逃避と神様の遊び

氷面上 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実逃避と神様の遊び

【Nコード】

N0733R

【作者名】

氷面上 悠

【あらすじ】

ごく普通の高校生、あまみやすすな雨宮鈴那。

普段どおりの日々のなか、唐突に迷い込んだ場所で彼が手にしたものは

その日から徐々に崩れていく日常に、どう立ち向かうのか？

非日常系ファンタジーコメディー（仮）

人物紹介

注意！！

物語の進行に伴い、加筆、修正を行うことがあるかもしれないのでネタバレ注意です。

・雨宮 あまみや 鈴那 すずな

性別 男

年齢 16歳 (高2)

本作品の主人公。

ダルそうな目に、切るのが面倒で少し長めの髪をしている。

突然迷い込んだ世界から脱出するために、“全てを見抜く眼”を手に入れる。

両親が行方不明になっており、現在は一人暮らし。

学力、運動能力ともに全てが一般平均程度だが、料理が異常に上手いなど、隠れた特技を持っている。

女の子が欲しかった両親が名付けた『鈴那』という名前に、少しコンプレックスがある。

・坂田 さかた 睦月 むつき

性別 男

年齢 16歳 (高2)

鈴那の親友であり、クラスメイト。

見事なまでの女顔であり、女装姿が妙に似合う。

本人は気付いていないが、男女共にかかりの人氣があり、巨大ファンクラブが存在するほど。

成績優秀だが、異常なまでに運動が苦手。

本人は気付いていないが、鈴那に友達以上の感情を抱いている節があり、周囲からはBL疑惑が絶えない。

唐突にとんでもない妄想をしたりするが、本人が言うには、想像力が豊かなだけらしい。

・御堂 みどう 風波 かざは

性別 女

年齢 16歳 (高2)

鈴那のクラスメイト。

同じように、突然迷い込んだ世界で”他者を魅了し、操る力”を手に入れている。

自分と同じく神様と遭遇した鈴那に近づく。

印象が薄く、物静かな性格。

肩より少し長めの髪に、冷えた瞳、全体的に感情が希薄。

琴羽とは浅からぬ因縁があるようで……

・白櫛 しろかじ 琴羽 ことば

性別 女

年齢 16歳 (高2)

鈴那の幼馴染。

両親がいない鈴那の家に家事を手伝いに行ったりしている。端正な顔立ちで、長い髪を後ろで一つに纏めており、一見すると清楚で可憐な少女。

しかし、その傍らでの鈴那の私物物色や、四六時中鈴那を監視しているなど、鈴那にストーカ儿的な行為を行っている。

鈴那に強烈な好意を抱いており、他人が好意を持って近づくと見境なく暴走する。

あの手この手で鈴那を誘惑しようとするも、実際はそういうシチュエーションに免疫がない。

・滝沢 たきざわ 深織 みおり

性別 女

年齢 17歳 (高2)

妙にハイテンションな鈴那たちの友人。

中学からの腐れ縁であり、ムードメーカーであると共にトラブルメーカー。

ショートヘアに意思の強そうな目で、見るからに活発そうな印象を受ける。

他人の色恋沙汰の話が好きだが、自分自身はあまり恋愛をしようとしていない。

ちなみに琴羽と同じクラスで、かなり仲がいい。

実は誰にも言っていない秘密があるらしい。

・神

性別、年齢共に不明

鈴那たちに能力を与える世界を作り出した張本人。姿を見せず、声だけでコンタクトを取ってくる。どこか掴みどころのない性格で、本当に全てが謎。何かの目的があるようにも思えるが、実際の所は定かではない。

・白檉 しろかし 実月 みつき

性別 女

年齢 15歳（高1）

琴羽の妹。

見事なまでの男殺しだが、本人は気付いていない様子。姉の鈴那への異常な好意の最終防衛ラインの役目を果たしており、鈴那には可愛がられることが多い。

その影響のせいか、本人も鈴那に好意を抱きつつあり、姉と敵対することもしばしば。

ツースイドアップテールの髪に、純真無垢な団栗眼が少し幼いような印象を与えるが、実はかなりの巨乳。

変な部分が勉強熱心なせいか、本人曰く、『えっちな話題は姉より得意』らしい。

プロローグ 01

物事の始まりはいつも唐突に訪れる。

そして世界は、際限なく理不尽な要求を繰り返す。

何度でも、何度でも……

その度に傷付き、立ち上がり、前に進むのだろうか？

それとも、挫折し、立ち止まってしまふのだろうか？

自分だけに都合のいい世界なんてありえない。

正直な話、現実の物事が辛いなら逃げてしまえばいいのだ。

大抵のことはそうしていれば問題ない……ハズだった。
だけど

「これはやり過ぎじゃないかなあ。神様」

さすがに、今の状況だけはどうかと思う自分がいるのであった。

プロローグ02

遡ること約一時間前

俺、あまみやすずな雨宮鈴那は、確かに、親友のさかたむしぎ坂田睦月の家にいた。

そう、そこから帰るはずだった。

「今日はそろそろ帰る」

そう言っただけは玄関へ向かった。

「珍しく早いね、いいことでもあるの？」

「いや、特になにも。ただ、今日は晩飯作るつもりだから」

「そう、うちで食べて帰ってもいいのに」

俺は両親が行方不明になっているせいで一人暮らしなのだ。

「じゃあ、またな」

ドアを開けて外へ。

だが、そこはいつもの道ではなかった。

「どうなってんだよ、これ……」

闇。ひたすらに深く、暗く、静かな漆黒の世界。

いや、深いかどうかさえわからない。

見える全てが黒、黒、黒。

浮かんでいるのか、落ちているのか。

上下左右、奥行き、全てがわからない。

「道もナシ、壁もナシ、出口もナシ。あるのは真っ暗な闇だけか

よ

そして、なにも出来ずに一時間ほどが経過し、現在に至るわけだ

が

「さすがに、腹減ったなあ」

そこへ唐突に、まわりの空間全体から声が響く。

『探せ、汝が望むものを探せ』

男とも、女とも、区別のつかないような、どこか中性的な声。

「何だ、誰なんだよ!？」

『そう焦るな、少年よ。逃げたりはせん』

「これは、アンタがやったのか？」

『そうだ。我がやった』

「なら、どうにか出来るんだろ？ 俺をここから出せ！」

まずはここから出ることだ、それだけを考えての質問だった。しかし

『それは出来ぬ。ここからは汝一人で出ねば意味がないのだ』

まあ、大体予想は出来ていたが……

「じゃあ、俺はどうすればいいんだ？」

『そうだな、己に秘められた力を見つければよい。ここはそういう場所だ』

謎の声は語り続ける。

『自らの力を見つければ、使えるようになれば、容易く脱出することが出来るはずだ』

「秘められた力がどうか言われてもなあ。そもそも、その力とやらはどうやって見つければよ」

『それは我にもわからぬ』

や、役に立たねえ……

そこで、俺はもう一つの疑問を投げかけてみた。

「そういえば、こんな空間を作り出しちまうアンタは、一体何者なんだ？ 正直、そこから謎なんだが」

まあ、答えは出来れば聞きたくなかったもので、最悪の回答だった。

『ああ、そういえば名乗ってなかったな。それは悪い事をした。

我は”神”だ』

「……えっと、かみ？ って、神様？！」

『うむ、そのとおりだ。どうだ、会えて光栄だろう？』

正直、心底うっとおしいな、この神様。

だが、ここで諦めるな、俺！

「ま、まあ、とりあえず能力を見つければいいんだよな」

『そうだとさつきからずっと言っておるではないか』

「アンタ、誰のせいだと思ってるやがる……」

とにかく集中しよう。

何か、何かがあるはずだ。

俺に、今の俺には全てが見えていない……

「ん？」 見えていない？ そうかっ……！」

『どうやら、何かに気付いたようだな』

そうだ、見えていないのなら見えるように”俺がなればい”だ
けじゃないか！

つまり、俺が求めるべきは

「”全てを見抜く眼”だ……！」

その瞬間、変化が生じた。

目の前が急に明るくなり、道が、出口が現れたのだ。

『さすがだな、合格だ』

その道を辿り、出口へ

「さて、さっさと帰るぞ」

そして、俺はそのふざけた世界から脱出することに成功した。

プロローグ03

出口を抜けると、俺は睦月の家の玄関にいた。

「やっと、帰ってこれた……」

「なに言ってるの？ まだ玄関のドアを開けただけだよ？」

「そりゃそうだ、って」ドアを開けただけ」！？

時計を確認すると、時間は俺が帰ろうとしたときそのままだった。なるほど、あの場所と現実では時間の流れが違うわけか……

「いや、何でもないって。気にするなよ。な？」

「そう？ じゃあ、気をつけて帰ってよね」

まったく、そのとおりだよ、親友。

「わかったよ。じゃ、明日学校でな」

そうして、俺はやっと帰路についたのだった。

Ground・01 日常崩壊の序章

翌日、俺はいつもどおり学校へ登校している。

ただ、いつもと違うことが一つだけある。

”眼”だ。

そう、昨日手に入れたあの眼

「畜生、絶対あの世界を出た時に無くなったもんだと思ってたんだけどな……」

この眼のせいで、昨日の帰り道はとてつもなく大変だった。

”全てを見抜く眼”なんて大層な能力は、文字どおり発動中ずつと俺に余計なものを見せ続けた。

通行人の下着やら、裸体やら、内臓やら……おまけに霊や死神、他人の思考まで見えるもんだから気が狂いそうだった。

そしてやっと、今朝になって力のONとOFF、微調整が若干出来るようになったのである。

「顔色悪いけど、大丈夫？」

睦月が妙に心配そうな顔で聞いてくるので、対応に困る。

女っぽい顔つきをしているだけに、妙にドキドキするな……

二年前に、一度女装しているところを見たことがあるが、全く違和感がなかったしな。

「いや、何でもない、大丈夫だから」

「ホントに？ 無理しないでよね、心配だから」

「ああ、無理はしないよ」

なんて会話をしていると、俺達の方にバタバタと手を振り、突っ込んで来る人影が

「ようっ、お二人さん。なになに、朝からBLですか!？」

常にテンションのメーターが振り切っているようなコイツは、滝た沢きよかわみお深織。

一応言っておくが、女だ。

「誰がBしだ、誰が！」

「え？ 違うの!？」

「何だよ、その意外そうな反応は……」

正直うんざりするな、このハイテンション。

「おはよう、滝沢さん」

「おっはよー、坂田くん」

「そうやって普通に挨拶すりゃよくないか？」

出来ればそうあって欲しいんだがなあ。

「ちつつち、それは違うよ雨宮くん。そういう冗談から友情が芽生えたりするんだぜっ」

「残念ながら、今の俺には憎悪しか芽生えなかったわ」

「なんか、二人とも仲いいね」

「ドコが?!」

あ、なんかハモった。

「ほら、息ぴったりじゃない」

やっぱ俺、コイツ苦手だわ……

そんなこんなで、もう学校。

「じゃーな、滝沢」

「バイバイ！ 坂田くん、雨宮くん。って言ってもクラスは隣だけだね」

「じゃ、また後でね。滝沢さん」

そうして、またいつもどおりの日常が始まる……ハズだと思っていた。

昨日の怪奇現象みたいなことが、他にも起こっていないければ、な。

教室に入った俺に、一人の少女が近づいてくる。

確か、名前は御堂風波。

俺の前で立ち止まった彼女は、とんでもないことを言い放った。

「雨宮鈴那。私を、貴方のドレイにしなさい」

意味がわからない。

状況を理解しようとするたびに、思考がフリーズする。

「ど、どどど、奴隷ってどういう意味だよ!？」

「? 言ったとおり。私を、貴方がドレイにすればいい
なんかもう、周りの奴等がドン引きなんですケド……

それと、言うなら普通、逆じゃないっすかね?

「お、おい。正気かお前!？」

「……そこまで疑うなら、好きなように、してみればいい」
そう言っつて、彼女は急に俺の手を自分の胸に

『お、おおおおおおおおおっ!!!』

『キヤアアアアアアアアアアッ!!!』

何故か、周りの生徒から歓声が上がる。

「ちよっ、何考えてんだ!」

俺はすばやく手を引き戻す。

「うん? まだ、足りない?」

「いや、そういう意味じゃなくてだな……とりあえず、話の続き
は休み時間だ。いいな?」

「わかった、それまで、待つことにする」

とりあえずは逃れることに成功したようだ……が、実際先延ばし
に出来ただけなので、物事は全く解決していない。

朝からこんな状態だったので、授業中も全く落ち着けない。

仕方がないので、俺は例の眼を使って鞆の中のマンガを読んでみ
たり(すごい疲れる)とか、他人のシャーペンに何本芯が入ってい
るか数えてみたり(もつと疲れる)とか……

そして、問題の休み時間である。

「あー、えつとだな、なんで奴隷なんかになりたいわけ?」

結局はそこからだ。

理由もなくこんなふざけた関係の成立を鵜呑みにしていれば、そ
のうち俺が破滅する。

「理由は簡単。貴方にも、なんとなくわかるはず」

「なんとなく………いっただいどういう意味だ」

「あなたも、”神様”に会ったんでしょ？」

「っ……！？　なんで、それを」

そうだ、あの日の出来事は俺しか知らないハズだ。
なのにどうしてコイツが知ってるんだ！？

それに、”貴方も”と確かにさっきコイツはそう言った。

「やつぱり、ね。私には、なんとなくわかる。そして、貴方も何かしらの力を得たのでしょうか？」

「そのとおりだが、さっきからのアンタの言い方だと、アンタも俺と同じように神様と出会ってるってことだよな？」

「そう、私も貴方のように、力を手にした者。それに、貴方のように力のせいで悩んでいる者」

なるほどな、つまり俺みたいな境遇のヤツが他にもいたって事か。
「んで、そのことと何の関係があるんだよ」

「私の力に関するがある。私^レが得た力は　”他者を魅了し、操る力”^レ」

何だよ、それ……俺の能力とは比べ物にならない程強力じゃねえか。

「この力は、確かに強力。でも、私が誰かに従っているうちは、使うことが出来ない」

「なるほど、そういうことかよ。それで俺にその抑制^{リミッター}をやれってことか」

彼女はこくりと頷く。

「はあ、わかった。だが、そういう関係になってやるだけだ、これ以上はない。」

「それでいい。私は、それでもいい。
これで、とりあえずは交渉成立か。

でもさすがに重くないか、この条件。

まあ、仕方ないかもな、この力のことも何かわかるかもしれない。

だが、この時の俺はまだ知らない。

この約束によって命の危険に晒されるなんて、予想出来なかったから。

いや、むしろ想像したくもなかった。

こんなことはまだ破滅の始まり　日常崩壊の序章プレリュードでしかなかったことを……………

幼馴染。

誰が聞いても魅惑の響きであろうこの言葉は、実際そんなもんじやない。

クラスの奴等は皆『それ、なんてエロゲ？』なんてほざきやがるが、現実はそのなにごくくない。

確かに面倒見のいい幼馴染は、傍から見れば理想の存在だろう。

そりゃあ、身の回りの世話をしてくれる人間がどれだけありがたいか、俺はよく知っている……が。

身の回りの世話だけに留まらず、他人の私物を物色して、ハアハアしている幼馴染をどう思うだろうか？

俺は正直怖い。

心底怖い。

なんでかって？ 簡単なことだ。

あなたは、一日のトイレの回数から誰とメールや通話をしたかまで全て知っている幼馴染と、普通に接することがはたして出来るだろうか……

例の約束をした日の昼休み、俺は御堂に呼び出されて屋上にいる。

さすがに昼食を食べないわけにもいかないなので、惣菜パンをいくつか持っていた。

「鈴那、待ってた」

あの後から急に俺を名前で呼ぶようになった御堂は、きつちりと弁当を持参していた。

「早いな。んで、用つてのはなんだ？」

「私と、貴方の力について。私は話したけど、詳しいことはまだ言っていないし、貴方の力は聞いてもない」

そりゃそうだ。

大体、その話をしない方がおかしい。

「ああ、なるほどな。まあ当然だけど」

「それで、どっちから話す？」

正直楽になりたかった俺は自分から話すことにした。

他人に隠し事をするのはあまり好きじゃない。

「じゃあ、俺の力について先に伝えとく」

「わかった。なら、私はあとでいい」

そして、俺が知りうる全てを話した。

透視や思考、普通は見えないものなど、あらゆるものを見ることが出来るこの眼のことを。

そして、今朝になってやっと見つけた抑制方法。

まあ、単純に意識のしように原因があったのだが、どうやら意識が乱れるような状況……つまり、動揺、緊張、興奮などの意識の変化が急に出たときに無意識に発動したりするようになるのだ。

簡単に言えば、平常心を保てば大丈夫なのである。

「なるほど、わかった。抑制は、私より困難……」

「そうなんだよ、説明はこんなかんじでいいか？」

理解が早いほうが助かるのだが

「まだ。実際に確認してない。」

「別に必要ない気もするんだが……簡単な方法でもあるのか？」
すると彼女はこくりと頷き、自分の胸に両手を置いた。

「私の、今日の下着の色を当てる」

ホントそういうのは勘弁してもらえませんかね。

「な、なにも下着じゃなくてもよくないか？」

とりあえず逃れたいと非常にマズイ。

「私は、別に構わない」

俺が構うんだけどなあ。

「わかった、それでいいよ……はあ……」

渋々眼を使つて御堂の胸元を透視する。

そこにあつたのは形のいい胸、そしてそれを覆う水色と黒のチエ

ツク柄のブラだった。

「どう?」

「み、水色と黒のチエック……」
平常心、平常心。

落ち着け、俺ええええええええ!!

取り乱しまくっていた俺だが、とりあえず暴走は回避出来た。

「じゃあ、答え合わせ」

ん? 答え合わせ……!?

そう言っつて、御堂は急に制服を脱ぎだした。

「ちよつ、待てつて。なんで脱ぐ?!」

とりあえず御堂を押さえて止めさせようとした俺は、バランスを崩しそのまま倒れこんだ。

御堂を押し倒したような体制で。

マズイ、これは非常にマズイ。

なんとか離れようとしたその刹那

屋上の入り口から、ガンツという何かを殴りつけたような音がした。

そして、さっきの動揺で勝手に発動した眼が俺に他者の思考を見せってくる。

『押し倒された……結構、大胆』

恐らくこれは御堂だろう。

問題はもう一つだった。

『鈴ちゃんすずが、鈴ちゃんすずが、誰かを押し倒してる……っ!?!』

俺を鈴ちゃんすずなんて呼ぶのは一人しかいない。

幼馴染幼なじみの白樫琴羽しろがしことば

俺の家に来て、身の回りの世話をしてくれたりする世話焼き。

そして、俺の私物物色の常習犯にして、俺のことなら大抵把握しているという、もはやほぼストーカー的な人間なのだが……
なんでここに!?!?

そして、さらに思考の読み取りは続く。

「それ以上鈴ちゃんに近づくなら、二度と目覚めたくないくらいシアワセな夢の世界に飛ばしてあげるけど?」

「私は、現実を生きてる。今が十分幸せ。だから必要ない」

竜虎どころか核弾頭の睨み合いレベルで危険なこの状況……正直、逃げ切れる気がしない。

「あのお、とりあえず誤解が危うい方向に発展してる気がするん

」

「「黙れ」」

「はい、申し訳ないです。ごめんなさい、死んで詫びます」

説得の余地ナシですか!?

しかも綺麗にハモったな。

「それは許さないから」

「もういつそ殺して……」

完璧にシンクロしている女子二人の言葉の槍でダメージが……

半泣きどころかもはや号泣寸前だよ、俺。

「とりあえず、二人はどういう関係なのカナ?」

今はその笑顔の裏に般若が見えるのは俺だけか。

「鈴那のドレイ」「ただのクラスメイトです」

その不穏な単語は今回に限っては絶対に聞きたくなかったわ。

「へエー、そう、そうなんだあ〜」

ギリギリギリギリ

「ちよ……マジで、死ぬって……ばっ」

そう言いながら幼馴染の首を締め上げないで下さい。

これはさすがに冗談言ってる状況じゃ

「それ以上は、駄目……!!」

さっきまで冷静だった御堂が声を荒げる。

だが、次の瞬間頭に痛みが走った。

「がっ、なん……だ?」

御堂の声が妙にガンガンと頭のなかで響く。

そして、どこか甘ったるいようなものに、意識が塗りつぶされて

いく。

首を絞められていたせいで、意識が朦朧としていたりとかそういう感じではない。

明らかに変だ。

何かはわからないが、何故か自分の意思が体に伝わっていないような感覚。

同じようなことになっているのか、琴羽も俺の首から手を離してぼーっとしているように見える。

「使いたくはなかった。でも、鈴那が死ぬと、困るから」
くぐもったような御堂の声。

”使いたくはなかった”……

その言葉が引っかかるが、うまく考えることが出来ない。

「今は、ただ、ゆっくりと眠ればいい」

その言葉に従うように、俺は意識を失った。

Ground・03 セットで妹はいかがですか？

夢を見ていた

遙か昔の記憶、今の自分、そして行方不明の両親の姿。

自意識はあるが、明らかに夢だ。

こういうのを明晰夢めいせいむって言うんだっけ？

曖昧で、不安定で、すぐにでも崩れてしまいそうな儂い夢……

幼いころの俺と両親、そして何故かもう一つ人影があった。

『誰だ？』

確かに俺は3人家族だったはずだ。

誰なんだよ、あれ……

子供の頃の自分より少し高い背の人影。

それが近づいてきて俺に飛びつき、倒れこんだ。

『なっ、なんだ!？』

重い。

明らかに人2人分ぐらいの重さがある。

そして、それは耳元でこう囁いた。

『忘れないで、私のこと。必ず、また会いに行くから』

こんな記憶を俺は忘れてたっつての……？

『おい、ちよっと』

目の前が光に包まれる。

もう夢は覚めてしまつらしい。

「待ってくれよ!」

起きた俺は、夢の中での言葉の続きを口に出してしまっていた。
恥ずかしいな……

だが、なんで体の重さは解消されない？

「おはよう。よく眠れた？」

「よかったー! ちゃんと何事もなく目覚めて」

御堂と琴羽が揃って声をかけてくる。

だが、お前らなんで俺の上に乗ってやがる。

「とりあえずどいてくれないか？」

「「やだ」「

出たよ、ハモリ拒絶。」

「いや、降りてくれないと動けないからさ」

結局15分間の説得の後、やっと降りてくれた。

「んで、ここは？」

「保健室だよ。この泥　この子が連絡してくれて、先生が運んでくれたらしいわ」

おい、今また泥棒猫って言おうとしたぞ。

「てか、らしいってお前も倒れたのか？」

「うん、なんでかわからないけどね」

じゃああれはやっぱり御堂の力だったわけか……

実際抗うことすら出来なかった。

そしてもうひとつ、重要なことが

「じゃあなんで2人して俺の上にはいたんだよ」

「それは、この女狐が鈴那の上に馬乗りになろうとしたから、私毛」

あ、お前は訂正しないのね……

「ふざけないでよ、この泥棒猫っ!!」

「それで、鈴那。さっきの、”待ってくれよ”ってなんのこと？」

「ちよっ、なんで無視!？」

ホント、仲がいいのか悪いのか……

「それに関しては追求しないでくれ。夢の話なんて他人にしたいくない」

実際、あれが俺の記憶そのままなのかはわからない。

でも、もし本当なら俺には、まだ父さんたちの手がかりがあるかもしれない。

「……そう、そうやって2人して私を無視するんだあ。ふうん、

どうせ、どうせ私なんて……」

あー、なんか琴羽はいじけてるし。

「悪かったって、無視なんかしないから気を取り直せ。な？」

「じゃあ、誓いの代わりに今ここでキスして！」

「いや、さすがにそれは無理だろ」

「ちっ……」

今明らかに舌打ちしたよな、コイツ。

「とにかく、そろそろ帰ろうぜ。もう放課後だろ？」

かなりの時間眠っていたようで、完全に授業は終わっているの
ある。

「わかった」

「そうだね、そうしよう！」

「俺はちよつと寄り道して帰るけどな」

調べ物もあるし、睦月の家に寄る用事がある。

「うん、いいよ。じゃ私は先に」

「私も」

今回は付いて行くとか言わないんだな、珍しいことに。

結局、成果のなかった調べ物と、睦月の家で用事を済ませて帰宅。
したはずだったんだが……

「なんでお前らが俺んちに居るんだよ!？」

そう、奴等がいた。

琴羽と御堂が。

「「おかえり」」

「なに平然と居座ってんだよ」

「奴隷は常に主人に奉仕するもの」「身の回りの世話をするのは、
妻のつ・と・め」

そこまで俺の生活を潰そうとするのか、お前らは。

返してくれ、俺の安息。

そしてどうやって入った、お前ら。

「夕食なら、もう出来てる」

手際よすぎるだろ。

悪い事態に発展する前に逃げておくか。

「悪い、今日はもう寝るわ」

「今夜は寝かせないぞ」

「何する気だ!？」

色々と身の危険を感じたので、渋々夕食を食べることにした。

結局、ここを開けるのには琴羽の持っていた合鍵を使ったらしい。

そういえば、毎日自然に入ってきてたよな。

どうやって手に入れたかは、詳しく聞く必要があるそうだが……

「なあ、帰ってくれないか？」

「「やだ」」

あー、はいそうですか……

「でも、お前ら服とかないのにどうやって」

「「ん」」

口に食べ物を入れたまま、二人が指す先には、旅行用のスーツケ

ースが4つほど積んであった。

おいおいマジかよ。

「私、今日からしばらくここに住むの」

「私は、この女狐の監視」

そして俺の意思は踏みにじられるわけか。

「もういいよ、どうせ言っても帰らないんだろ？」

もつと早く不自然だと気付くべきだった。

恐らく学校であつさりと引いたのはこの為だろう。

幸か不幸か、両親の部屋の他にも空いている部屋はある。

「とりあえず、食べ終わったら部屋を用意してやるから。お前ら

も手伝えよ」

「「同室は駄目なの?」」

「却下」

こんなのが2人も居たら、まともに寝れる気がしない。
いろんな意味でな。

結局、2人には2つあった空き部屋を、それぞれ使ってもらおうとにした。

とりあえず前途多難だなあ、おい。

そして、恐らく一番危険であろう質問を投げかける。

「2人とも、風呂はどうする?」

「当然鈴ちゃんと一緒にと入る!」

「なら、私も」

「……無理に決まってるだろ」

やっぱりね、言うと思つてたよ、最初^{ハナ}っからな。

「風呂なんか一緒に入るわけねえだろ! 子供じゃあるまいし」

「鈴ちゃん、私だつてもう大人だよ?」

「そういう考えなら余計に悪いわ!!」

「なら、奉仕は?」

「駄目」

「「ちっ……」」

今度は2人揃つて舌打ちですか!?

俺は何も悪くない、絶対にこの2人が異常だ。

「とりあえず、俺は最後でいいからお前ら先に使え」

こうすれば、さすがに俺の入浴中には入ってこないだろう。

「鈴那、覗きに来て、いいよ?」

「斬新ですねエエエアナタっ!?!」

俺からは行かねえよ、絶対にな。

「またそういうこと言つて、この泥棒猫がつ!!」

「なら、女狐もやればいい」

「鈴ちゃん、私の入浴見てみたくない?」

変わり身早いな、おい。

「いや、見ないから。どんだけ見せたいんだよお前ら」

「ちえー、いいもん、入ってくるから」

「なら、私も」

「なんでアンタと!?!」

「監視」

なんだかんだで2人で入るみたいだな、よかったよかった。

「テレビでも見るかな」

テレビの電源を付けて、ソファーに座った頃に、ちよつどシャワーの音が聞こえ始める。

ちくしょう、あんなに言われると意識しちまうじゃねえか。

まあ、見ようと思えば見れないこともないのだが、さすがに今回は自重しておかないとな。

いつ暴走するかわからないわけだし。

結局、何事もなく終わってくれるようで何よりだ。

さすがにこれ以上面倒事を起こされると身が持たない。

「今日はもう何も起こらないでいてくれるとありがたいけどな。」
そんなことを言っていると、テーブルに置いてあった琴羽の携帯が鳴りだした。

「おい、琴羽。携帯鳴ってんぞ」

とりあえず伝えてみるが、風呂だし出るのは無理

「つとと、間に合った？」

走ってきやがったよ……それもタオル1枚で。

「おい、馬鹿なんて格好してんだ!？」

「もしもし」

「無視かよ!」

「あゝ、ごめんね、ダーリンがうるさくって」

「誰がダーリンだよ!？」

もう突っ込むのも疲れてきた。

とかやってる最悪のタイミングに不幸は重なるもので

俺の安息を更にぶち壊すべく、玄関のインターホンが鳴った。

「ちよつと、どうすんだこれ」

とりあえず、琴羽に風呂場の辺りまで移動してもらい、俺は玄関へ。

「すみません、お待たせしました。」

謝った俺の前に立っていたのは、意外な人物だった。

「あ、こんばんわです、先輩」

御堂たちより少し小柄な体躯に、ツーサイドアップテールの髪。

琴羽の妹、白櫛しろかじみつき実月みつきだった。

ちなみに年は俺達の1つ下で学校も同じだ。

「こんな時間にどうしたんだ？ 琴羽のことで来たのなら、すぐに連れ帰って欲しいんだが……」

「いえ、先輩のご期待に応えられないのは残念なんですけど、違っ
んです」

「だったら、いったい何の用でこんな時間に？」

まあ、そこで最悪の返答が来ることも大体予想は出来たが

「私、家出してきちゃいました。先輩、泊めてもらえませんか？
つくづく運がないなあ、俺。」

こうして、前代未聞の夜は幕を開けたのであった。

Ground・04 隠蔽された過去と壊れた家族

「ごめんなさい先輩、迷惑かけてしまつて」

結局、実月ちゃんを泊めることになり、部屋が足りなくなつた。

「とりあえず、今日は俺がソファで寝るから実月ちゃんは俺の部屋使つてくれる？」

急にだつたとはいえ、さすがに女の子をソファに寝させるのはちよつと問題があるだろう。

だがしかし、当然納得しない奴がいるわけで……

「なんで実月が鈴ちゃんの部屋なの！？ 私も鈴ちゃんの部屋がいい」

お前を俺の部屋で寝かせるとろくな事にならないんだが。

「私は、別に構わない」

案外御堂は正常だつた。

「とにかく、これで決定な。くれぐれも変な気を起こすなよ、特に琴羽」

「あの、先輩悪いです。私なんか先輩の部屋を使わせてもらつたなんて」

「だつたら私が」

「却下」

「ひどくない!？」

「まあ、気にしないでいいから。とりあえず今夜は俺の部屋使つてよ」

「でもでも、本当にいいんですか？」

「気を使いすぎだつてば」

「わかりました！ ありがとうございますっ」

その後、実月ちゃんに先に風呂を使つてもらつて、最後に俺が入浴。

問題なく夜は更けるはずだつたのに、また面倒な事が起こりやが

った。

2時を過ぎた頃に、誰かがソファアールに入ってきたのである。かなり迷惑なんだが……

「うふふ、鈴ちゃんと添い寝」

やっぱり琴羽か、釘刺しておいたのにやりやがったなコイツ。

「何が添い寝だこの馬鹿がッ!!」

「あれ、起きてた？ なら尚更ムフフなイベントを起こさねばなるまムギヤあぁー」

とりあえず言動が危なかったたので蹴り出した。

「痛いなあもう。怒っちゃうぞ!」

「キレてるのはこつちだ馬鹿が! いい加減しろよ」

「別にそんなに怒らなくてもさぁ……ちよつとだけならいいですよ?」

「お前の場合は度が過ぎてるからキレてるんだがな……」

結局こうなるんだよなあ、予想はしてたが最悪の展開だ。

そして更に災いが降りかかってくる。

「女狐、抜け出して何をしようとしたの?」

「お姉ちゃん……また先輩にいやらしいことしようとしたんですか……?」

なんか、背後に異常なまでの怒気と殺気を纏った御堂と実月ちゃんがいいた訳で……

「やつぱり息の根を止めるべき」

「うふふ、いけないことをしたらお仕置きですよ……」

なんかヤバイ、この2人もしかしたら琴羽より危険かもしれない。

徐々にゆらりゆらりと歩み寄って来てるんだが、めちゃくちゃ怖い。

完全に目がイッてるよね、ヤバイ人の目だよな!?

「ちよ、落ち着きなさいって、謝るから」

さすがにこれは琴羽も怖いよなあ、でも普段のお前ってキレたらあんなかんじだって知ってるか?

「とりあえず、2人ともその辺でやめないか？」

「鈴那がそう言うなら……わかった」

「先輩はお姉ちゃんを許すんですか？」

「いや、許すとかどうとかより早く寝たいんだけど」

マジでこれは本心だつて事を理解していただきたい。

「わかった。なら引き上げる」

「そうですね、私も寝坊しちゃうのは困りますから」

今さっきまで猟奇的殺人事件が起こるようなムードだったよね？

「琴羽もとつと部屋に戻れ。俺は寝る」

「ちよつと待って、お願いがあるんだけど」

「何だ？ またふざけると今度は確実に死ねる気がするが」

「腰が抜けちゃって立てないの」

そこまで怖かったのかよ！？

まあわからんでもないがどうしろっていうんだ。

「お願い、部屋まで運んで」

なんでそういう時だけ泣きそうな顔するかな……

実際、普通に可愛いのでこういう事をされると非常にドキドキする。

「仕方ないか、けどどうやって運ぶか……」

おんぶとかお姫様だつことかいろいろと危ない気がする。特に俺の命が。

「な、何でもいいよ。すつ、鈴ちゃんならどこを触られても平気だから……」

待て、お前は確信犯なのか？ わかつて俺を罠にはめようとしてるのか？

「一応聞いておくが本つつ当に腰が抜けて立てないんだな？」

「だからそう言ってるじゃない、意地悪……」

だから泣きそうな顔をするなよ、余計対応に困るだろうが。

「わかったわかった、んじゃあほれ、掴まれよ」

とりあえず背中を向ける。

まあおんぶなら確実性があるだろう。身の危険は大いにあるがな。
「あ、ありがとね」

そつと琴羽が肩を手で持つ。

「しつかり掴まつとけよ、落ちたら余計悲惨なことになるぞ」
落ちなくても俺は悲惨なことになるかもしれない。

てかしつかり掴まってるせいで胸がかなり当たってるんだけど。

「うん。でもなんか子供の頃を思い出すなあ」

「そうか、でももう変な気は起こすなよ」

だが、聞こえてきたのは返事ではなく静かな寢息だった。

なんだよ、自分も眠いんじゃないか。

起こさないようにゆっくりとベットに降ろし、布団をかける。

「自分だけ幸せそうな寝顔しやがって」

そして俺はゆっくりとソファアへと戻った。

翌日。

当然のごとく昨日のあれは現実な訳で、朝起きても背中に琴羽の胸の感触が纏わり付いているような感じがする。

「……落ち着かねえ」

今朝の我が家はとことん異常だった。

制服にエプロン姿の女子高生が3人も居るのだから、ある意味天国かもしれない。

ただし、3人が3人とも場合によっては修羅になりかねないのである意味地獄だ。

「朝ご飯出来たよ鈴ちゃん」

「鈴那、今日のは自信作」

「先輩への恩返しも兼ねて心を込めて作りました」

琴羽は昨日の件があつたせいかわ、少し上機嫌に見える。

御堂と実月ちゃんも普段どおりで何よりだ。

だが

「なあ、なんでこんなに大量にあるんだよ」

そう、確かに美味しそうではあるが、量が多すぎる。

どうして朝食だけで確実に十人分近くあるのか大いに気になる。

「多分3人ともが全員分作ったから」

御堂、冷静な状況分析をありがとう。だが何故お前も全員分作ったのか教えてくれ。

「そもそも材料は？」

「それは昨日のうちに私達が調達しておいたの」

なるほどな、うちの冷蔵庫にはあまり食べ物が残っていないからはずだからな。

ちなみにうちの冷蔵庫は両親が料理好きだったせいか、かなり大型の物が2台あったりする。

「食べるだけ食って、残りは弁当にでも入れるか……」

「あ、そうですね。確かに弁当を忘れてました」

「確かにそれならもつたいくない」

「えー、でも昼も同じの食べるの？」

「文句を言うな。というか自業自得だろ」

朝食には多すぎる量を食べ、残りを弁当にすることで事態は問題なく解決した。

「一応言っておくが、お前ら登校時間はずらせよ？」

「なんで？」「やだ」「わかりました」

くっ、実月ちゃんは別として、こいつらに期待した俺が馬鹿だった。

「なんでって同居してるのがバレルとマズイだろ。」

「わかった。じゃあ私たちが先に出る」

「むううう、でも鈴ちゃんが秘密にしてほしいって言うなら私はいいよ」

「もう何でもいいから先に行ってくれ」

結局、御堂たちが先に出ることになった。

俺は睦月との待ち合わせがもう少し後なので、いつもどおりの時間に出ることにした。

「先に行つて待つてる」「じゃあ、先に行つてるね」「では、お先に失礼します」

「ああ、俺は睦月と後から行くよ」
「そうして今朝も登校。」

「おはよう、睦月」

「あ、おはよう鈴那」

「いやあ、今日もいい天気で何よりだね!」

まあ、予想はしてたがやっぱり今日もあいつが出没した。

「またか滝沢」

「またかつて何、そこまで嫌われてるの!？」

「いや、別に嫌いとかそういうんじゃないけどさ」

「はっ! もう2人の間には入る余地もないと!？」

「ちげえよ!! またBLとか考えたる!？」

「あはは、朝から元気だね2人とも」

「なあ睦月、他人事じゃねえぞ？」

たまにコイツの鈍さが羨ましくなる。

「そ・れ・よ・り・も 琴羽から聞いたけど、御堂さんと琴羽

と実月ちゃんと同棲してるの？」

チツ、よりにもよつてコイツに教えてやがったのか琴羽のやつ。

「え、本当なの鈴那？」

「おい、滝沢。琴羽から聞いた事を綺麗さっぱり忘れる」

「え、どうして? それはホントっていうことなのかな？」

「忘れないなら忘れるまで頭部をアスファルトで殴打してやるが

!？」

「怖っ!! 雨宮君それはさすがに洒落になんないからさあ!？」

「ねえ鈴那、本当に同棲してるの!？」

「睦月、お前も十秒以内に忘れる」

「え、何っ!？ それは僕も忘れないとアスファルトで殴打なの

!？」

こんな情報広められたら俺は登校拒否か酷けりゃ自殺だぞ。

「10、9、8、7」

「ちよっ、もうなんかカウント始めてる！？ マズイよ坂田君、多分これ確実にマジだよ」

「とりあえず鈴那を止めよう。2人でやれば大丈夫なはず……」

「4、3」

「ヤバっ、仕方ないか。ゴメンネ雨宮君っ」

直後、滝沢が俺に思いっきりダイブしてきた。

ちなみに運動音痴な睦月はダイブ出来ずに転倒していた。

「うおあっ！ 何すんだ!？」

「いやあ、さすがにまだ死にたくないもんで。アハハ」

出来れば俺は睦月が来てくれた方が助かったんだがな。

理由？ そんなのは単純明快。

こんなことをやってても一応滝沢は女子だ。

それもあまり言おうとは思ったりしないが、結構コイツ胸がデカイ。
イ。

普段なら意識したりしないんだが、状況が状況だ。

それに昨日の一件があったせいで、俺は迂闊にも滝沢を意識してしまった。

まあ、そうなるもんだな、昨日恐ろしいまでに発動しなかった俺の眼が……ね。

「滝沢、わかったからもうどいてくれ！ 誰にも言わなけりや忘れなくてもいいから!!」

「ふっふっふ、そう簡単に引き下がるとお思いですかな？」

「とつと降りてくれ、その、恥ずかしすぎて爆死しそうだ……」

登校の真っ最中での出来事。

つまり、周りは当然同じ学校の生徒だらけだ。

ついでに、今の俺は開眼状態なので周囲の人間の糸纏わぬ姿が見える。

当然だが滝沢も例外ではない。

「あ……。いやあ、これはその、ねえ」

周囲の視線にやっと気付いた滝沢はすばやく飛び退く。

「本つつつつ当にゴメン!!」

「俺も悪かったよ。頼むから誰にも言うなよ」

「一応肝に銘じておくね。アハハ……」

「僕は誰にも言わないよ、鈴那」

やっぱり持つべきものは友だと実感した瞬間、その事件は起きたわけ

「鈴ちゃん、さっきはなあにをやったのかな？」

恐る恐る振り向くと、そこには完全に修羅モードの琴羽がいた。

ヤベ、情報漏れを防ぐのに必死で琴羽の完全監視を忘れてた。

「いやぁ琴羽、あれはただの事故だから落ち着いて、ね？」

「そうだよ白樫さん。事故だから、単なる事故」

必死に説得してるがお前から冷や汗の量が半端じゃねえよ!?

「鈴ちゃん……ホ・ン・ト・二?」

「ああ、安心しろ。事実だよ」

「そう、なら安心したよ」

この切り替えの速さには毎回驚くな……

結局その後は何事も無くいつもどおり授業は終了し、下校時間になった。

「なんでお前らは朝からあんなことするかな……」

お前らっていうのは当然滝沢と琴羽のことだ。

「だって深織が鈴ちゃんにいかがわしいことをしようとしてたか

ら……」

「だから事故だってば琴羽……」

「早とちりで危うく俺が死ぬところだったぞ」

「その前に僕ら2人を殺る気満々だった鈴那の言う台詞じゃないよね?」

何のことだ? 全く記憶にないなあ、あはは。

「とりあえず、今夜の飯は俺が作るかな……」

「え、なんで？」

「もうあんな惨劇は御免だ」

惨劇というのは今朝の朝食のことなんだが、弁当にしたところまではよかった。が、俺のだけやたらと汁物を入れやがったせいで靴のなかがかオスなことになったのである。

幸い教科書と弁当は鞆が別だったため無事だったが、体操服がそれはもう悲惨な状態だった。

「じゃあ私は部活だからバイバイ！」

玄関を出た所で滝沢はさっさと部活へ行ってしまった。

ちなみに印象そのままに陸上部だったりする。

「さて、帰るか」

「えっと……僕も一緒にいいのかな？」

「当然だろ。というかむしろいてくれ、俺の為に」

「そっか、ありがとう。」

「なんで礼を言われなきゃいけないんだよ。なんなら晩飯も食べていくか？」

「本当に！？ 鈴那の料理って美味しいんだよね。じゃあ家に連絡しておこうかな」

「2人は相変わらずだよ。ずっと変わらない」

琴羽が唐突に口を挟む。

「そうかもな。でもお前もそんなに変わってないって」

「そう、かな？」

「先輩たちって仲が良くって羨ましいです。私もお姉ちゃんと双子とかなら良かったのになあ」

実月ちゃんが満面の笑みでそんなことを言ってくる。

やっぱり可愛いよね。昨日のアレが嘘みたいだ。

だが、何故か御堂は暗い顔をしていた。

いつも無表情だが、それ以上にどこか落ち込んでいるような表情だった。

「御堂。おい、どうかしたのか？」

「え、いや、何でもない」

「いや、なんか落ち込んでるように見えたからさ」

「本当に大丈夫。なんとも無いから……」

何かが引つかかる。

御堂があんな顔をしたのは、確か実月ちゃんが『双子』って言うてからだったような気がする。

でもあまり深入りするの悪いか。

「じゃあ買物だけちゃっちゃと済ませて帰るか」
そうして俺達は下校した。

買物物を済ませ家に着くと、40代ぐらいの男の人が玄関のベルを鳴らしているのが見えた。

「うちになにか用ですか？」

振り向いた男の人は意外にも顔見知りだった。

「ああ、鈴那君。それにやっぱりここだったか、琴羽も実月も」
そう、白樫了介^{しろかしりょうすけ}。琴羽と実月ちゃんの父親である。

「なんで、なんで来たの父さん！」

「そうです、なんで来たんですか！！」

家出してきたとは言っていたが、やはりムードは険悪だった。それも実月ちゃんだけでなく琴羽まで。

「心配だからに決まってるじゃないか。早く帰ろう、母さんも待ってる」

「母さんには連絡取ってるはずだよ？ 別にいいって言うてくれまし」

「だが、鈴那君に迷惑をかけるのは悪いだらう」

「だから何！？ 鈴ちゃんはいいつて言うてくれた。父さんなんかというより私はここのほうがいいの！！」

「おい琴羽、急にどうしたんだよ！？」

明らかにいつもと様子が違う。何があったのかは見当も付かないが……

「先輩……先輩は私たちの味方ですよ。お姉ちゃんや私を追い出したりしませんよね？」

「でも一体何があったんだよ……。あんな琴羽を見るのは初めてだよ」

「知ってるんだよ、私。父さんが不倫してる事！バレないか思ってたの！？」

不倫……ってマジかよ。

「そういうことですよ先輩。父さんは母さんを愛してなかった。抱ければ誰でも良かったんでしょね」

「どういう事だよ、抱ければって」

「お姉ちゃんが見つけたのが1人ならそんな結論には至らなかったでしょうね」

1人なら？ おいおいまさか……

「今月だけでも27人です。本当に最っつ低の人ですよ……」

27人……

それだけの人と不倫してたってのか。

「待ってくれ琴羽、誤解だ！ あれは知り合いと出かけてただけで」

しかしその言い訳は以外にも御堂によって遮られた。

「いい加減白々しい嘘は止めたらどうですか、この糞野郎」

「何だ唐突に、部外者が口を挟むんじゃない！」

普段の御堂とは雰囲気が違う。夜にキレた時もあんな感じじゃなかった。

「部外者？ 戯言は死んでからほざいてください。」

それに普段ならあんなに喋らない。

こんなに饒舌な御堂をかつて見たことがあっただろうか。

それになんで琴羽の父さんに……

「急に好き勝手言って、最近の若いのはみんなこうなのか！？」

「今まで好き勝手やってきた貴方が言えた事ですか！！ しばらく見ないうちに自分の娘の顔まで忘れたかこのドカスがア！！」

今、なんて言ったんだ……

娘。確かに御堂はそう言った。

「嘘、だろ……。御堂が琴羽の父さんの娘？」

「なんだと？ 私の娘？ 馬鹿にするな！！ 誰だお前は！？」

「はあ、そういう反応ですか。本つつつ当にクズですね！ そこまで頭が腐っているとは思いませんでしたよ！！」

「もういい、今日は帰らせてもらう。ったく何だつてんだ！」

白樫家の父が去った後、御堂はゆっくりと口を開いた。

「こうなってしまったら、話すしかない……」

「ああ、ちゃんと聞かせる。どういことなのかちゃんとな」

「これって、僕も聞いていいのかな？」

「見ちまった以上聞くしかないだろ。協力者は多い方がいいしな」

「どういことなの、あなたが父さんの娘って」

「そうです、私も知りたいです。一体どうい事なのか」

そしてゆっくりと御堂は事の真相を語り始める。

「あの男、白樫了介は確かに私の父親だった人。そして私は貴方の、白樫琴羽の双子の姉」

「嘘、でしょ……。そんなこと私も知らないのに」

「知らなくても当たり前。私が御堂の家の養子になったのは1歳の時だから」

「じゃあ御堂はどうしてそのことを？」

「私は、中学に上がる時に今の両親から全て事情を聞いた。私の本当の両親の事、双子の妹がいる事、そして生みの母が亡くなっている事……」

「琴羽と御堂の母さんが亡くなってる？ じゃあ今の母親は誰なんだよ……」

「ちよつと待って下さい。じゃあ今の母さんはどうなるんですか！？」

「あの人は私が養子に出されてからすぐに再婚した人。だから琴羽は血が繋がってない」

「そんな……そんな事って……」

「じゃあ御堂と琴羽の母さんってのはいつ亡くなったんだ？」

「多分私が養子になる少し前。あの男は2人分の世話をするのが難しくなつて私を捨てたんだから……」

「なるほどな……。そりゃ顔も覚えてない訳だ」

しかし、この話が事実だとかなりややこしいな。

何より一番混乱してるのは琴羽たちだろう。

御堂に唐突に姉だと言われ、挙句父親の不倫騒動

「つたく、ロクなことにならないな。でも、今回の件は俺達も傍

観者つて訳にもいかないな」

「鈴、ちゃん……？」

「さつさとケリつけて平穩を取り戻そうぜ！ もちろん御堂もな」

「どう、して……？」

「そんなの決まつてんだろ。せつかく出会えた生き別れの姉妹じやねえか、家族は大切にしないと」

何より俺みたいに行方不明なんかじゃないんだ。今からでも遅くなんかない。

「そうだね。鈴那、とりあえずどうしよつか？」

「とりあえずは飯の前にあのふざけた野郎と決着付けるかな？」

「でも、先輩……」

「そうだよ鈴ちゃん。これ以上迷惑なんか……」

それでも2人は乗り気ではない様子だった。

でもそれがなんだ？

「普段から面倒事起こしとして今更何言つてんだよ。」

「そうそう、それに僕達は協力するって前提で話を聞いたんだよ？」

「睦月の言うとおりで。ま、そんなに気負うぐらいなら後で恩返

しでも期待するよ」

「あり、がとう。本当にありがとう」

また泣きそうな顔して、そういう顔は似合わないっての。

「先輩、ありがとうございます。全部終わったら先輩の料理、」
馳走して下さいねっ！」

涙が零れてはいたが、とても可愛い笑顔だった。

「御堂もそれでいいな？」

「わかった。でも、恩返しはちゃんとさせてもらおう」

「全く、律儀なヤツだよ。」

「でも、それが私だから」

「何だよ、そういう顔も出来るじゃねえか」

その時、初めて御堂が笑った。

Last Ground 紡ぐ絆と新たな希望を

結局、解決してやるとは言ったものの

「どうすんだよ、てかドコに居るんだあの野郎は……」
早速行き詰っていた。

「どうせまた女遊びだよ。くだらない！」

琴羽よ、それに近いしいほどにお前のストーリーキングも面倒だと気付いてくれないか？

「まずは情報を集めちゃうのがいいんじゃない？」

「けどな睦月、何の情報を集めるんだ？」

「そこが重要だ。何を交渉材料にするか……」

まあ、ぶつちやけると琴羽たちの母さんに事情を説明するのが単純明快でいいのだが、それをするだけの証拠が俺達にはない。

「それなら、先に母について知るべき」

「何を？」

鞆の中をゴソゴソと漁り、御堂が取り出したのは1冊のノートだった。

「ここに、母のことが書いてある」

「日記か何かですか？」

実月ちゃんの問いに御堂はこくりと頷いた。

「母の日記。私達が生まれた次の日から書いてたみたい」

「んじゃ、琴羽にそれを読めと？」

「そう、母のことをちゃんと知って欲しい」

「わかった。じゃあ読むね」

恐る恐る日記を開いて読み始めた琴羽はページをめくることに赤面していき、最終的に卒倒した。

「おい、大丈夫か琴羽！？」

「ひゃ、ひゃい……」

呂律回ってないって。

それより、どんな内容なんだよあの日記。

「鈴那、読む？」

「あ、ああ、とりあえず」

読んでみないとわからないわけだしな。

そして俺はその日記を読み始めた。

8月9日

昨日初めての子供が生まれた。

すごく嬉しい。

2人とも可愛い女の子に育って欲しいなあ。

不満な点があるとすれば了介が出産に立ち会わなかったことかな……

退院したらボコボコにしてやろう。

何この最後の！？ 最初のいい文章が台無しなんですケド。てかこの頃から既に不倫してたのかよあの野郎は……

8月11日

了介がヘラヘラしながら病院に来た。

なんかムカついたから傍にあった果物ナイフを投擲してビビらせてやった。ざまあみる

でも先生に怒られた。いいじゃん別に

出産の時来なかったことを謝罪もせずに言い訳をしたらから

『お前の粗末なバナナを切り落とすぞ』って脅かしてやった。

そしたら涙目になったから一応全裸土下座で許してやった。

それにしても風波と琴羽は可愛いなあ。

……あれ？ なんだろう、すっごい親近感が湧いてきた。あの野郎に。

読み進めることに御堂たちの母親だったのがよくわかってくるん

だが……

というか、病院で全裸土下座って鬼だよね！？ いや切り落とすのも駄目だけど。

8月15日

今日は了介が来ないので風波たちにずっと話しかけてた。

お見せ出来ません とか お見せ出来ません とか お見せ出来ません とか色々言葉を教えてあげた。

大人になったら重要だからしっかり覚えておこうね
いい女になるには知識は重要だから

先も同じような下ネタのオンパレードだったので読むのを諦めた。

「なあ御堂、お前はコレを全部読んだのか？」

「うん」

「お前がそんな大胆な理由がよくわかったよ……」

これは18歳以下が閲覧していい日記じゃないだろ。

「でも、一番見て欲しいのは最後のページ。そこに母の思いが書いてある」

「本当だろうな？」

「それは保障する」

仕方なく俺は最後のページを開く。

10月13日

やっぱりもう長くないらしい。

了介は連絡すらしてこない。

2人のことが心配で夜もまともに眠れない。

一応母さんたちが手伝いに行っているらしいけど、了介だけだとすごく心配だ。

もつといるんなことをしたかった。

ずっと風波と琴羽の傍にいたかった。

孫の顔とかも見たかったのになあ。

もつと、もつともつと生きていたい！

死にたくなんかない！！

でもそんな人なんて他にもたくさんいる。

生まれてすぐ亡くなってしまう子だっているんだ。

私だけ欲張ったりできないけど、私が、白櫛羽波しろかしのなみが生きたいた

証を残せたことは誇りに思う。

別に綺麗じゃなくてもいい。

少しぐらい間違ってもいい。

ただ生きてほしい。

長生き出来なかった私の分まで生きてほしい！！

そして幸せになってほしい。

私のことはどうでもいい。

だから自分を、好きな人を愛せる人間になってほしい。

普通に友達を作って、普通に恋愛をして、普通に結婚する。

そんな普通の人生でいい。

私の大切な宝物、世界で2人だけの娘の健やかな成長を祈って

いよう。

いつまで生きていられるかはわからないけれど、私はそれでも

幸せだったよ。

生まれてきてくれてありがとう。

やっぱり、そっくりじゃないか、こいつらと。

本当に優しい、優しすぎる人だ。

こいつらの為なら俺の不幸な能力ぐらいいくらでも使ってやって
もいいかな。

「いちいち気にしてもしようがない、これが最良の方法だろうし
な」

「何をする気？」

「俺の眼を使う。それが一番手っ取り早い」

「でも……」

「いつかはバレる。それが早いか遅いかだろ？ それに、これは俺の意思だ」

「……わかった。それなら私も話す」

結局御堂と俺の力について、なんで御堂が俺の奴隷になんて言い出したか、その他もろもろの説明を琴羽と実月ちゃん、それに睦月にもしつかりと聞いてもらった。

「先輩達がそんな能力を持ってたなんて、私ってすごい人と知り合いだったんですね！」

「鈴ちゃん、それで他の女の子の裸とか見てないよね？」

「じゃあ、鈴那の眼で今回のことを解決するの？」

「そういうことだな。とりあえず記憶を覗いちまえば大体は把握できる」

お前らの適応能力には驚くな……
てか琴羽、目が怖い。

そして俺達は白樫家へ向かった。

「父さんは家に帰ったみたいだし、さっさと終わらせちゃあ
まあ、最もなんだが何故お前が主導権を握っている。

「先輩、よろしく願います」

「鈴那、本当に僕も行くの？」

「ここで逃げるとかナシだから、道連れ」

心底嫌そうな顔するなよ睦月。悪いとは思っけどさ。

「いざという時は、私が」

「ああ、まあそれがないように祈りたい」

あの力は正直使い方間違えると人殺せるからな。

そしてインターホンを鳴らす。

『はい。ちよつと待つてね』

しばらくして出てきたのは白樫家の母、白樫美咲しらかしみなみさんだった。

「どうも、お久しぶりです」

「本当に久しぶりね。ほら、みんな入って入って」

中に案内され、俺たちは本題のことを話すことにした。

「母さん、よく聞いて。父さんが不倫してたの」

「不倫？ 急にそんなこと言われてもねえ」

やはりいきなり証拠も無い状態で話しても意味がないか。

「ここ最近だけでも結構な人数を見てるのよ。だから、この際ハッキリしておいた方がいいんじゃないかって」

「それは父さんと別れるってこと？ でもね、しっかりとした証拠がないと」

だが琴羽はその言葉を遮るようにもう1つのことを口に出した。

「話はそれだけじゃないの。私は母さんと血が繋がってないんでしょ？」

「……そんなこと、誰から聞いたの？」

「ここにいる、私の双子の姉に」

そう言っつて琴羽は御堂を見た。

「そう、あなたが。なら、もう隠してもしかたないのね……」

「俺たちは、本当のことを知った上で美咲さんがどうするかを聞きに来たんです」

「じゃあ不倫ってというのは……」

「少なくとも琴羽は見てる。それを今から証明します」

「だから、母さんには父さんと呼んできてほしいの」

少し切なげな表情をしたあと、わかったとだけ言い残して美咲さんは部屋を出て行った。

心の準備は出来た。あとは失敗しないように集中するだけだ。

そして数分後、美咲さんがあの野郎を連れて戻ってきた。

「なんだ、またお前らか……」

「お父さん、本当のことを喋って下さい」

実月ちゃんも普段より真剣な表情だ。

御堂はやはり少しうつむいている。

「そうだよ、ちゃんとホントのこと言ってる！」

「了介さん、この子たちの言ってる事は本当なんですか？」

さあ、ここが正念場だ。ここで喋るか嘘をつくか……

「デタラメに決まってるだろう、子供の言うことを全て信じてどうする」

「OKわかった。アンタはそういう対応してわけだな？」

「どういう意味だ！ いい加減にしろ、いくら君でもそれ以上は許さないぞ」

俺はすぐさま眼を発動させ、記憶と本音、思考を覗く。

「先週の日曜日、午後6時37分。駅前で32歳の同僚と待ち合わせてドコへ行ったんですか？」

「何？ そんなことを聞いてどうする、ちよっとした飲み会だ」
本音を隠しても筒抜けだったの。

「じゃあ、その日お酒が大好きなアンタは飲み会に行ったのになんで酒臭くなかったんだろうな」

「確かに日曜帰ってきてても特にお酒の匂いはしませんでしたね」

「グツ……。それがなんだ！ その日は酒を飲まなかったんだよ」

「嘘ばっかり！ 父さんがその日女の人とやらしい店に入っているの見たんだから！！」

まだ認めないか、この辺で諦めてくれた方が楽でいいんだけどな。

「本当ですか、了介さん？」

「そんな訳ないだろ、見間違いだ！ それに、「なんでそんなことを知ってる」」

思考を読んで被せてやった。

「いい加減にしるよ。今の俺にはアンタの記憶も考えてることも何もかもが見えてるんだよ！！」

「ふざけるな！！ そんな馬鹿げたことがあるはずがない」

「まあ、なにせ神様のプレゼントだしな」

だが、俺たちの予想を遥かに上回るハプニングが起こることは俺にも想像出来なかった。

直後、玄関のインターホンが鳴る。
それもしつこいまでの連打。

『了介、会いに来たよ〜』

『早く出てきてよ』

『てかなんでこんなにいるの?』

『待たせないでよ!』

なんて女の声。

そう、女・女・女。

「ほら、本当だったでしょ」

「ああ、だけどこれはさすがに……」

多すぎる。多分こんな芸当が出来るのは

「私が、呼んでおいた。こっそり力を使って」

やっぱりか。ホント敵に回したくないなあ、こいつ。

「……了介さん、これはどういう事でしょうか?」

あ、なんか美咲さんスイッチ入ってるっぽい。

めっちゃ怖いって、冷や汗が止まらない。

「い、いや、これはその、あれだ、ちょっととした手違いで……」

「へえ〜、手違いで女性が沸くんですか? 寝言は寝てからいい

ましようね」

待って、何持ってるの美咲さん!?

それ消火器ですよ、それはさすがに人殺せるよ!?

「は、はは、いや、冗談だろ? そんなもので殴ったら……」

「とりあえず、その下半身の醜いモノを叩き潰しましょうか」

ちよ、ヤバくね?

ホントに死者が出るよ!?

「御堂、とりあえず止めて。力使ってもいいから」

「ん、わかった」

そして、次の瞬間御堂の透き通った声が響く。

「静まれっ!」

やっぱりあの感覚に包まれて、俺たちは身動きが取れなくなる。

ですよ、鈴那君」

美咲さん、アンタもか!?

やはり俺に安息はないようだ。

「わかったよ、泊めればいいんだろ？ そのかわり変なことしたら追い出すからな……」

そして琴羽たちの居候が決定し、俺の平穩は再び奪われた。

「とりあえず、ちよつと出かけてくるわ」

「あれ、どこに行くの？」

「きょうは睦月と約束があるんだよ」

そう言つてドアを開けた瞬間例のアレにまた迷い込んだ。

「またかよ!？」

「今回は私も一緒」

声のした方を見ると、そこには御堂がいた。

『久しいな、よくぞ来てくれた』

「別に来たくて来たわけじゃねえよ。今度はなんだ？」

『いや、よく頑張った。それに汝にはもうその力はいらないかと思つてな』

自称神は御堂にそう言った。

「うん、確かにもういらぬ。私にはもうわかつたから」

『そうか、ならその力は我が回収しておこう』

「おい、ちよつと待て。俺のもいらねえぞ」

『ん？ いやしかし汝は目的を達しておらんだろ』

「いや正直役に立たないんだが……」

『まあ別に困ることもなからう』

「困るから言つてんだよ!!!」

「イツホントに腹立つな。」

『まあ、とりあえず保留だ保留。というより遊びだし』

「ふざけんな! 俺のも」

『では、さらばだっ』

「おい、都合悪くなつたら逃げるな!!!」

直後空間は崩壊し、元の場所に戻っていた。

「相変わらず人の話を聞きもしなかったなあ野郎……」

「おはよう、鈴那」

何故か眼前20cmほどの場所に御堂が立っていた。

「なんでそんなに近いんだ？」

「このドアからあつちに飛んだから」

奇跡的なタイミングだな、おい。

「ちよつとだけ、話がある」

そう言つて連れて行かれたのは近所の自販機の前のベンチだった。

「で、話つて？」

「私のこと、名前で呼んでほしい」

「へ？ そんなこと？」

意外だった。まさかそんな話のためにわざわざ呼んだのか。

「結構重要。もう私は奴隷でもないから」

「わかったよ。じゃあ今度からは風波って呼べばいいのか？」

「うん、そうして、ほしい」

何故か風波は少し赤くなつてうつむいていた。

「そ、それと、言っておきたいことがもうひとつ」

「なんだ？ 出来るだけ手短かに頼む」

睦月との待ち合わせがあつたりするので遅れる訳にもいかないしな。

「私は、貴方が好き。一人の男として、雨宮鈴那のことが好き」

「なつ、突然何を!？」

「あんな力に頼らずに、私は貴方に好きになつてもらえるように努力する。だから」

そう言いながら風波はそつと俺にキスをした。もちろん唇に。

「何やつてるの、鈴那……」

風波が離れたところで見たのは驚愕の表情で固まった睦月だった。

「いや、あのこれはだな、コイツが急に」

「キスしてたよね、明らかに」

「はい、ごめんなさい……」

「はあ、御堂さんも場所を考えようよ。こんなところでキスなんて僕には無理だよ。たとえ相手が鈴那でも」

あれ、なんか背筋に悪寒が。

気のせいだ、気のせいに違いない。

睦月に限ってマジでそっち側なわけがない……と信じたい。

「キス？ キスって、接吻のことよね？」

「ああ、てかこの状況でそれ以外何が」

振り向くと修羅がいた×2。

「鈴ちゃん、朝から泥棒猫とキスなんていい度胸ね」

「先輩、どうやら命が惜しくないようですね……」

「待て、落ち着け2人とも。こんなところで殺人は少々マズおぶ

あつ

時既に遅し。2人の鉄拳は的確に俺の鳩尾を打ち抜いていた。

「俺の、周、りに、まともなヤツは、いない、のか……」

よく晴れた日曜の午前8時。

俺は早々に気を失ったのだった。

この過酷な状況はいつになったら解消されるのだろうか。

くだらない神の遊びに巻き込まれてからロクな事が起こってない。

とりあえず神よ、現実逃避ぐらいさせてくれ。

俺の世界は今日も波乱に満ちている。

Ground・00 こんなのでアリですか？

白樫家の不倫騒動が解決してから2週間。

相変わらず俺の毎日は不幸と女難とカオスに満ちている。

幼馴染の変態と姉とは違って常識的なその妹、さらにその幼馴染の無口無表情な生き別れの双子の姉。

まったく

「どこのゲームの世界だバカ野郎」

「何が？」

と、横から声をかけてきたのはその幼馴染こと白か…否、水島琴羽^{みずしまことほ}である。

あつぶねえ、離婚して名字変わったんだった。

と、そこへまた別の人物。

「おはよう、鈴那。今日も良い日」

最近ちよつとは感情表現が豊かになってきた琴羽の生き別れの姉こと御堂風波^{みどうかぜな}。

それともう一人。

「あ、先輩おはようございますですっ」

琴羽の妹、水島実月^{みずしまつき}ちゃん。

この二人、まるで琴羽と血が繋がっているようには見えない。主に内面が。

「それより鈴ちゃん、今朝はキスしてくれないの？」

「元からしてた覚えもねえよ!？」

「もう既に、鈴那の初めては、私のもの」

「おいそこ、火に油を注がないッ!！」

こういった危ない発言が俺の人生を火ダルマにしている気がする。

「いいもんいいもん、下の初めては私が貰うから!！」

「だから朝からそういう発言をするなって!? めちゃくちゃ心臓に悪いんだよ!！」

「だって……」

「だってじゃない、慎め。お前次やったら本気でシメるぞ？」
このままだと本気で身が持たない。

正直、考えただけで気が遠くなるような

「私、先輩にならお仕置きされてみたいですっ」

「……実月ちゃん、本つつつ当にそういう危ない発言は止めて！
そのうち俺爆死するよ？」

あれ、おかしいなあ、前より事態が悪化してる気がするよ？
しかもこういう時に限って多分奴等が……

「おうおうなんだね？ 今度はハーレムですか？」

「おはよう鈴那。変な噂が流れないように注意だけはしてね？」
やっぱり来たよ。

悪友、滝沢深織たきざわみありと心の友、坂田睦月さかたむつき。

「てか今雨宮君スツゴイ嫌そうな顔したよね？ 俺のハーレムに
ちよつかいを出すなってか？」

「ハーレムじゃねえよ！？ だいたい、お前は話をあらぬ方向に
ぶっ飛ばし過ぎなんだよ」

「でもなんか向こうはまんざらでもない様子だよ、鈴那？」
言われて例の三姉妹（？）を見てみると、口々にまた勝手な事を
言ってるやがった。

「あゝ、すまん、俺先行くわ」

「どうしたの鈴那？」

気にかけてくれてありがとな、睦月。
でも

「もうこの空気に耐えられねえんだよおおお……！！！！」

そのまま俺は一目散に走り出し、その場から逃亡した。
後ろからぎゃあぎゃああとわめく声が聞こえるが、気にしない。

そのまま校門に到達、したまでは良かったのだが

「に、逃げ切った。とりあえずこれ以上変なことにならないうち
につぎやああア！？」

安堵していた俺の体がきりもみ状に宙を舞った。

というより詳しく説明すると、校門横の木から飛び降りた女の子のドロップキックがこめかみに直撃したのだった。

「ごっ、が、ぐっばあ」

そのまま地面を数回バウンドし、やっと止まる。

直後に駆け寄ってくる人影。

「すみません！ あの、大丈夫……じゃないか、えっと保健室うう」

うちのと違う制服を着た女の子。

さつきドロップキックをかました張本人が、激しく狼狽していた。

「いつてえ、死ぬかと思った。というか多分普通の人なら大怪我だよな」

近頃あいつ等にボッコボコにされたりしたせいで、ダメージの流し方が上手くなっている気がする。

「あ、よかったあ！ 死んじやったかと思っただけ心配しました……」

「一応大丈夫。けど何故木の上から？」

「その、出来心で。あはは」

その出来心で俺は死にかけたんですケド。

「えっと、転校生？ 制服が違うみたいだけど」

「はい、3年1組に転入してきた、皆槻木みなつきこ陰かげって言います」

「3年って先輩じゃん！ すみません、年上とは知らなくて。2年の雨宮鈴那です」

俺が名乗った直後に、先輩はすこし表情を歪めたような気がしたが、気のせいだろう。

そうしている間にも例の集団が追いついてきた。

「あ、やっべえ。すみません急いでるんで」

「え？ うん、またね」

先輩は不思議そうな顔をしていたが、結局は何事もなかったかのように手を振っていた。

まあそのあと結局俺は下駄箱周辺で琴羽に捕縛されたが……

「くそつ、めちやくちゃシバかれた……」

満身創痍の俺の横を琴羽、風波が並ぶ。

当然俺をフルボッコにしたのもコイツら。

「で、あの朝一緒だった人は誰？」

笑顔の裏に物凄く冷たいものを含んだ琴羽が俺に尋ねる。

「3年に来た転校生だとき、皆槻木陰って言うらしいぞ」

「そう、それならよかった」

風波はそれで納得し、いつもどおりに戻る。

だが琴羽は少し様子が違った。

「3年、木陰……まさかね」

「ん？ どうした琴羽、知り合いか何かか？」

「え、ち、違うよ。私も知らない」

少し変にも見えたが、それ以上詮索するのも止めた。

最悪、眼を使えば知ること出来るだろうが、今回は止めておくべきだろう。

現在昼休みの序盤。

まだのんびりする時間も残っているし、あとはゆっくり過そうとしたのだが

「あ、こんな所にいた！ もう、探したよ雨宮ケン」

駆け寄ってきたのは先輩だった。

正直、探してまで俺に何か用があるようには見えなかった。

「何か用事ですか？ わざわざ探してまで」

「そうだよ。あのね、今朝のお詫びに私とデート、しよつ」
その瞬間、世界が凍りついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733r/>

現実逃避と神様の遊び

2011年10月8日19時28分発行